

# 中国語の存在文における遊離数量詞

山口 直人

Floating Quantifiers in Chinese Existential Sentences.

YAMAGUCHI Naoto

## 内容提要

林璋 2002 广泛讨论了数量词和动词之间的动态问题。 该文还谈及了汉语存在句里的数量词的“游离(floating)”现象。 至今为止, 在现代汉语里“游离数量词(floating quantifiers)”这一语言现象还是一个很少讨论的问题。 与此相反, 在日语语法方面, 这二十多年来游离数量词的问题一直是热门话题之一, 已经有很多的研究成果。 其中 Miyagawa1989 算是最有影响的著作。

本稿按照 Miyagawa1989 的分析方法来探讨汉语的游离数量词, 结果发现 Miyagawa1989 的分析方法同时能解释汉语存在句里的游离数量词现象。

## 目 次

0. はじめに
1. 二つの存在文(“动态存在句”と“静态存在句”)における数量詞
2. 数量詞と名詞との遊離の可否
3. 数量詞遊離に関する Miyagawa1989 の分析
  - 3.1 相互c統御条件
  - 3.2 非対格性の仮説

4. 中国語の遊離数量詞
  - 4.1 中国語遊離数量詞の特徴
  - 4.2 林2002の指摘の再考
5. 残された問題
  - 5.1 機能主義からの反論
  - 5.2 動詞の分類の問題
6. おわりに

## 0. はじめに

林璋2002は SVO 構造の単文全般にわたって考察を行い、以下の指摘を行った。それは要約すれば「動詞の後の数量詞には性格を異にするものがあり、その数量詞の性格の違いに応じて、数量詞に後続する名詞との遊離 (floating) の可否にも違いが生ずる」ということである。

本稿では対象を存在文（その中でも特に宋玉柱1992のいう“動態存在句”と“静態存在句”）だけに限り、この二つの存在文における数量詞と名詞との遊離の可否について若干の考察を行いたい。その際、Miyagawa1989が日本語の遊離数量詞を分析するのに用いた方法を中国語にも適用することによって、Miyagawa1989の分析が中国語存在文における遊離数量詞現象にも当てはまることを主張したい。

## 1. 二つの存在文（“動態存在句”と“静態存在句”）における数量詞

林2002は宋玉柱1992のいう“動態存在句”と“静態存在句”に現れる数量詞は意味的に異なるという指摘を行った。（林2002 p. 98。なお、傍線および日訳は山口）

1-1 小路上走着五个老人。

〈小道を5人の老人が歩いている〉＝“動態存在句”

1-2 院子里种着三棵柳树。

〈庭に3本の柳の木が植えてある〉＝“静态存在句”

林2002によれば、1-1の“动态存在句”での数量詞は「同時量」を表し、1-2の“静态存在句”での数量詞は「達成量」を表すという。「同時量」とは「常に同時解釈を受ける動作継続の文における数量」であるという(p.97)。確かに1-1では5人の老人が同時に歩いていることが描写されている。一方の「達成量」とは「動作・作用にともなって増減し、その完了時に達成される数量」のことであるという(p.92)。確かに1-2では、この3本の柳は同時に植えられたとは限らず、時間的に前後して植えられた可能性もある。1-2が描写しているのは最終的に3本の柳の木が庭に植えてあるということだけである。

さらに「同時量」と「達成量」とでは動詞との構文関係に違いがあるとして、林2002は以下のように図式化している。(同書 p.98。ここでOは、存現文の文末の名詞であり、意味上の主語を担う要素である)

1-3 V + [ 同時量 + O ]

1-4 [ V + 達成量 ] + (O)

つまり“动态存在句”の「同時量」を表す数量詞は、後続する名詞(図のO)と直接的に構文関係を結び、一つのまとまりを成す。よって、数量詞と動詞との構文関係は逆に間接的であるという。一方“静态存在句”の「達成量」を表す数量詞は動詞と直接的な構文関係を結ぶことによって一つのまとまりを成すので、名詞(図のO)との結びつきは逆にゆるいという。

## 2. 数量詞と名詞との遊離の可否

林2002は前章の1-3、1-4で図式化した主張の傍証として、1-1、1-2を次のように書き換えたときにみられる適格性の差を挙げている。(林2002 p.98。なお、林2002では文中に“在”が無いが、本稿では“在”を補って考えていく)

2-1 \*老人在小路上走着五个。

〈\*老人が小道を5人歩いている〉<sup>注1)</sup>

2-2 柳树在院子里种着三棵。

〈柳の木が庭に3本植えてある〉

林2002の主張は2-1と2-2の適格性の差を正しく予測する。つまり、数量詞と名詞との結びつきが密な“動態存在句”の1-1は2-1への書き換えを許さないが、数量詞と名詞との結びつきが疎な“静态存在句”の1-2は2-2への書き換えを許すことが、林2002の主張から正しく導かれる。

林2002の挙げる1-1、1-2から2-1、2-2への書き換えを、中国語における「遊離数量詞」の現象と考えれば、“動態存在句”と“静态存在句”とでは遊離数量詞の可否に差があることになり、大変興味深い現象である。次章では遊離数量詞について比較的研究が進んでいる日本語の分析を簡単にみることにする。

### 3. 遊離数量詞に関する Miyagawa1989の分析

3-1 友達が2人新宿で田中先生に会った。(Miyagawa1989 p. 28)

3-1の主語名詞「友達」のことを数量詞「2人」の「先行詞」と呼ぶ。3-1のように数量詞がその先行詞から離れた位置に生起する現象を「遊離数量詞」という。管見によれば、中国語において遊離数量詞の研究はほとんどみられず、林2002はそうした意味では貴重な論文である。一方、日本語において遊離数量詞はかなりの研究の蓄積があり、そのうち Miyagawa1989は遊離数量詞に関して大変重要な著書である。Miyagawa1989は「相互c統御条件」と「非対格の仮説」を二本柱にした分析を提案している。以下、Miyagawa1989の分析を簡単に概観してみたい。

#### 3.1 相互c統御条件

3-1に比べて次の3-2は許容度が低い。

3-2 \*友達が新宿で田中先生に2人会った。(Miyagawa1989 p. 44)

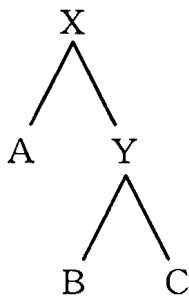
3-2の数量詞「2人」の先行詞を「友達」とする解釈は不可能である。3-2が3-1に比べて許容度が低いのは、単に3-1に比べて3-2のほうが先行詞と数量詞が遠く離れているからではないかという疑問が生じる。しかし、

後で3-7をみると分かるように、遊離数量詞の可否は単に先行詞と数量詞の距離といった単純な理由によるのではなく、統語的な制約が働いているように思われる。

3-1と3-2の適格性の差を説明する統語的な制約としてMiyagawa1989が主張するのが「相互c統御条件」である。相互c統御条件とは、遊離数量詞とその先行詞に関する統語的制約であり、以下のように定義される。

「相互c統御条件」：数量詞（またはその痕跡）とそれが修飾する先行詞（またはその痕跡）は互いにc統御していなければならない。<sup>注2)</sup>

c統御とは「 $\alpha$ と $\beta$ が互いに他を支配せず、 $\alpha$ を支配する最初の枝分かれ節点が $\beta$ をも支配するとき、 $\alpha$ は $\beta$ をc統御する」と定義される。



上図においてXはA、Y、B、Cのすべてを「支配」しているが、A、Y、B、Cのいずれも「c統御」してはいない。AはY、B、Cを、YはAを、BはCを、CはBをそれぞれc統御する。

また「互いにc統御している」とは、「2つの要素が姉妹関係を持つ（つまり同じ要素に直接支配されている）」ということである。上図ではAとY、BとCの関係が相互c統御の関係である。

次に3-1と3-2のS構造を比較してみる。遊離数量詞を分析するにあたって、以前は「2人の友達」から「2人」を移動させる分析が採られていたが、最近では数量詞は表層文での位置に初めから基底生成されると考えられている。<sup>注3)</sup>

3-3 (= 3-1)    [IP 友達が 2人    [VP 新宿で田中先生に会った]]

3-4 (= 3-2) \* [IP [NP 友達が] [VP 新宿で田中先生に2人会った]]

Miyagawa1989の相互c統御条件によれば、3-3では数量詞「2人」と先行詞「友達」が共にIP節点に直接支配されており、互いにc統御する関係にあるので適格となる。一方3-4ではVP節点が邪魔をして「2人」と先行詞の「友達」が相互c統御の関係を持ってないので不適格になる。このようにMiyagawa1989の方法は3-1と3-2の適格性の差を正しく予測する。

Miyagawa1989の相互c統御条件の考え方は次の3-5でも同様に有効である。

3-5 \* [IP [NP 子供が ] [VP ゲラゲラと2人笑った]]

(Miyagawa1989 p. 44)<sup>注4)</sup>

さて、次の3-6は完全に適格文であるが、一見すると3-5と同じ構造をしており、相互c統御条件の反例であるように思える。

3-6 学生がオフィスに2人来た。(Miyagawa1989 p. 43)

3-6' [IP [NP 学生が ] [VP オフィスに2人来た]] (ただしこのS構造は後で修正する)

この問題を解決するのがMiyagawa1989の分析のもう一つの柱である「非対格性の仮説」である。

### 3.2 非対格性の仮説

非対格性の仮説では自動詞を「非能格動詞」と「非対格動詞」に二分する。これら二つの自動詞には以下のような意味的、構造的な定義がなされる。

非能格動詞：意図的な動作・行為者 (agent) を表層の主語にとる自動詞であり、表層の主語はD構造の段階から主語位置 (IP指定部) にある。

非対格動詞：非意図的で、受動的に事象にかかわる対象・主題 (theme) を表層の主語にとる自動詞であり、表層の主語はD構造ではVP内の目的語位置に生成するが、S構造で主語位置に移動する。

非対格性の仮説は、一見すると遊離数量詞に関する相互c統御条件の反例と

思える3-6のような例に的確な説明を与える。

3-6 学生がオフィスに2人きた。

3-6は3-5と同じ構造をしているように見えるが、3-5と違い(i)「[NP 2人の学生]がオフィスに来た」や(ii)「[NP 学生が2人]オフィスに来た」といった相互c統御条件を満たす文と比べても見劣りしない適格性を持っている。そればかりか、3-6を3-7のように先行詞と数量詞の距離を遠く離しても依然として適格な文である。

3-7 学生が昨日遠路はるばると指導教官のオフィスに2人来た。(作例)

ところが実は3-5と3-6はそれぞれ非能格動詞文と非対格動詞文であり、D構造レベルでの主語の位置が異なっていると考えられている。よって、先にあげた3-6'を3-8のように修正しなければならない。

3-5 \* [IP [NP 子供が] [VP ゲラゲラと2人笑った]]

3-8 (=3-6) [IP [NP 学生が i] [VP オフィスに t<sub>i</sub> 2人来た]]

つまり3-6は非対格動詞文であるために、表層文の主語「学生」は本来動詞の補語位置に生成されていた。そのため「学生」がS構造でIP指定部へ移動した後も、VP内には痕跡の*t<sub>i</sub>*が残っている。その*t<sub>i</sub>*と数量詞がVP内で相互c統御条件を満たすので適格文になるというわけである。

このようにMiyagawa1989の「相互c統御条件」と「非対格性の仮説」を二本柱にした分析は、日本語遊離数量詞の振る舞いを正しく予測することができる。

## 4. 中国語の遊離数量詞

### 4.1 中国語遊離数量詞の特徴

山口2003は中国語の遊離数量詞について、Miyagawa1989の分析を応用することによって、中国語でもMiyagawa1989の方法は基本的に中国語の遊離数量詞にみられる振る舞いを正しく予測しうることを主張した。以下、中国語における遊離数量詞について概観してみる。

日本語と中国語の遊離数量詞現象を比較したとき、もっとも顕著な違いは日

本語の遊離数量詞が文中の様々な位置に生起しうるのに対して、中国語の遊離数量詞は動詞の補部位置以外には生起しえないことである。

- 4-1 学生が3冊の本を燃やした。
- 4-2 学生が本を3冊燃やした。(目的語の直後)
- 4-3 学生が3冊 本を燃やした。(主語の直後)
- 4-4 3冊、学生が本を燃やした。(文頭)
- 4-5 他烧了三本书。〈彼は3冊の本を燃やした〉<sup>注5)</sup>
- 4-6 他烧书，烧了三本。〈彼は本を3冊燃やした〉
- 4-7 他把书烧了三本。〈彼は本を3冊燃やした〉
- 4-8 他书烧了三本。〈彼は本は／を3冊燃やした〉
- 4-9 书，他烧了三本。〈本は／を彼は3冊燃やした〉

以上の比較から、中国語の遊離数量詞は動詞の補部以外には現れえないことが分かる。もし中国語の遊離数量詞も Miyagawa1989の相互c統御条件に従うとすれば、中国語の数量詞が動詞の補部にしか現れえない以上、それと相互c統御の関係を持ちうるものといえ、直接目的語以外には考えられない。以下に挙げるように、中国語の数量詞は直接目的語からの遊離と非対格動詞の主語からの遊離だけが許されるようである。<sup>注6)</sup>

(1) 非能格動詞の主語からの遊離：

非能格動詞主語からの数量詞の遊離は、相互c統御条件を満たさないので不適格となる。

- 4-10 \* [IP [ NP 小孩儿 ] [VP 哇哈哈地笑了两个]]  
〈\*子供がワハハと2人笑った〉
- 4-11 \* [IP [ NP 小鸟 ] [VP 在天空中飞着一只]]  
〈\*小鳥が空を一羽飛んでいる〉<sup>注7)</sup>

(2) 非対格動詞の主語からの遊離：

非対格動詞主語からの数量詞の遊離は、相互c統御条件を満たし適格となる。

- 4-12 [IP [NP 学者 i] [VP [PP 从北京] [VP 来了 三位 t<sub>i</sub> ]]]  
〈学者が北京から3人来た〉



4-13 [IP [NP 猪 i] [VP 病死了 五口 t i ]]

〈豚が病気で5匹死んだ〉

(3) 他動詞の主語からの遊離：

他動詞主語からの数量詞の遊離は相互 c 統御条件を満たさないので不適格となる。

4-14 \* [IP [NP 学者] [VP 把自己的著作 i [VP 烧了 三位 t i ]]]

〈3人の学者が自分の著書を焼いた〉という意味（つまり“三位”が“学者”を修飾する読み）は表しえない。

4-15 \* [IP [NP 从北京来的留学生] [VP 在新宿跟田中老师见了两个 ]]

〈2人の北京から来た留学生が新宿で田中先生に会った〉という意味（つまり“两个”が“从北京来的留学生”を修飾する読み）は表しえない。例文3-4も参照のこと。

(4) 他動詞の直接目的語からの遊離：

他動詞の直接目的語からの数量詞の遊離は、相互 c 統御条件を満たし適格となる。

4-16 [IP 他 [VP 把书 i [VP 烧了 三本 t i ]]]

〈彼は本を3冊焼いた〉

4-17 [IP 张三 [VP 把女朋友 i 给李四 [VP 介绍了 三个 t i ]]]

〈張三は女友達を李四に3人紹介した〉

(5) 他動詞の間接目的語からの遊離：

他動詞の間接目的語からの数量詞の遊離は、相互 c 統御条件を満たさないので不適格となる。

4-18 \* [IP 张三 [VP 把情书 i 给女朋友 [VP 寄了 三个 t i ]]]

〈張三は恋文を3人の女友達に送った〉という意味（つまり“三个”が“女朋友”を修飾する読み）は表しえない。

4-19 \* [IP 张三 [VP 把那个很漂亮的姑娘 i 给男朋友 [VP 介绍了 t i 两个 ]]]

〈張三はそのきれいな娘を2人の男友達に紹介した〉という意味（つま

り“两个”が“男朋友”を修飾する読み)は表しえない。

以上みたように、Miyagawa1989の分析が予測するとおりに、中国語ではD構造において、数量詞とVP節点内で相互c統御の関係を持ちうる直接目的語と非対格動詞主語だけが遊離数量詞を許す。

#### 4.2 林2002の指摘に対する再考

ここで再び林2002の指摘に立ち戻ってみる。林2002は宋玉柱1992のいう“动态存在句”と“静态存在句”のあいだに見られる遊離数量詞の可否の差を、それぞれのとる数量詞の性格の違いに求めている。林2002の主張をここに再録すると以下のようなになる。

1-1 小路上走着五个老人。

〈小道を5人の老人が歩いている〉 = “动态存在句”

1-2 院子里种着三棵柳树。

〈庭に3本の柳の木が植えてある〉 = “静态存在句”

1-3 = “动态存在句”： V + [ 同時量 + O ]

1-4 = “静态存在句”： [ V + 達成量 ] + (O)

林2002の主張は以下のようなものである：

「“动态存在句”の「同時量」を表す数量詞は、後続する名詞(図のO、存現文の意味上の主語)と直接的に構文関係を結んでいるため、両者の結びつきは固く、数量詞の遊離は不可。一方“静态存在句”の「達成量」を表す数量詞は動詞と直接的な構文関係を結んでいるので、名詞(図のO)との結びつきは逆にゆるく、数量詞の遊離が可能になる。」

2-1 \*老人在小路上走着五个。 〈\*老人が小道を5人歩いている〉

2-2 柳树在院子里种着三棵。 〈柳の木が庭に3本植えてある〉

林2002の主張は確かに正しい予測をするが、残念ながらこれは中国語だけの説明力しかない。もしMiyagawa1989の分析が林2002が指摘した現象をも説明できれば、Miyagawa1989の分析は日本語・中国語共に予測しうるものであり、林2002の分析よりも高い説明力を持っていることになる。では、Miyagawa1989

の分析は林2002が指摘した現象をうまく説明できるであろうか？筆者には十分可能であると思われる。

木村1981 (p. 25) は中国語の「結果補語構造」と「動作の結果としての受け手の状態を表す“V着”存在文」を平行したものととらえており、ともに「受け手優位の原理」とでも呼ぶべき傾向があるとしている。例文1-2および2-2はいずれも「動作の結果としての受け手の状態を表す“V着”存在文」であるため、動作の仕手は言及されておらず、もっぱら動作の受け手である「柳の木」を主体にした表現となっている。つまり、例文1-2と2-2の（意味上の）主語はいずれも本来は動詞の目的語として生成されたものであるが、これらの文では動作の仕手が表面に現れず、動作の受け手に焦点を当てた表現になっている。よって、1-2から2-2への書き換えは、他動詞の目的語からの数量詞の遊離と考えることが可能になり、これが適格文になることをMiyagawa1989の分析は正しく予測する。（4.1節の（4）を参照のこと）

一方、例文1-1と2-1は例文1-2および2-2とは異なり、「動作・行為の主体である仕手の進行中の動作を表す“V着”存在文」である。よって、そこに用いられている動詞は、意図的な動作を表す非能格動詞“走”であり、文の（意味上の）主語“老人”は行為者を表している。よって、例文1-1から1-2への書き換えは非能格動詞主語からの数量詞の遊離と考えることが可能であるから、やはりMiyagawa1989の分析はこれが不適格になることを正しく予測する。（4.1節の（1）を参照のこと）

## 5. 残された問題

### 5.1 機能主義からの反論

これまでの議論で、中国語存在文の遊離数量詞についても、Miyagawa1989の分析が有効である可能性をみた。しかし、語順が比較的柔軟な日本語と異なり、語順が厳格な中国語では、遊離数量詞が起こりうる可能性はかなり制限されてしまう。すでにみたように、中国語では遊離数量詞が現れうる位置は動詞の補語位置しかない。つまり、中国語の数量詞は学校文法で言うところの「定

語」として名詞、代名詞の前に現れるのが普通であるが、もしもこれを「遊離」させるとすれば、数量詞は必ず「補語」として動詞の直後に現れることが義務的となる。

たとえば5-1のような存在文の数量詞を遊離させるには、5-2の可能性しかない。

5-1 墙上挂着两幅齐白石的国画儿。〈壁に2枚の齐白石の中国画が掛かっている〉

5-2 齐白石的国画儿在墙上挂着两幅。〈齐白石の中国画が／は壁に2枚掛かっている〉

ところが5-1と5-2では文の構造がまったく変わってしまっている。5-1と5-2が構造を異にすることで、(意味上の)主語の定性に差が生じることは無視できない問題である。5-1の文末の“两幅齐白石的国画儿”は一般に「不定」と解釈される。つまり、「齐白石が描いた中国画の中のある2枚」ということである。一方、5-2の文頭の“齐白石的国画儿”は「定」と解釈されるのが普通である。よって、5-2の日訳は「が」以外に「は」でマークすることも可能である。

ところが、文頭的主語(遊離した数量詞の先行詞)の定性が弱い場合は、遊離数量詞の適格性が落ちる傾向がある。

5-3 桌子上放着一本书。〈机の上に1冊の本が置いてある〉

5-4 ??书在桌子上放着一本。〈本が／??本は机の上に1冊置いてある〉

5-4の“书”には5-2とは違って修飾語がついておらず、定性の弱い主語といえる。一般に中国語は不定主語が文頭に立つのを嫌う傾向があるので、5-4はこのままでは坐りの悪い文となってしまう。5-4は次の5-5のように対比の文脈の中で使えば適格性が増す。日本語でも5-4に「は」を使うと文のすわりが悪く、5-5のような対比文脈の中で使われて初めて安定する。

5-5 书在桌子上放着一本,在书架上放着两本。〈本が／は机の上に1冊置いてあり、本棚の上に2冊置いてある〉

以上の事を考慮すると、本稿で見えてきた中国語の存在文における遊離数量詞

の問題は、相互c統御条件で説明されるような純粋な統語論だけの問題ではなく、多分に語用論的な要因を含んでいる可能性がある。事実、日本語の遊離数量詞においても、相互c統御条件にもとづく統語的な分析に対して、特に機能主義的な立場や動詞の語彙的アスペクトにもとづく観点からの反論がなされている。(代表的なものとして三原1998や高見2001、高見・久野2002がある)

このうち三原1998は、日本語において遊離数量詞が成立するには、動詞が「結果性」という概念を持つことが不可欠との指摘を行っている。三原1998のこの指摘は中国語の存在文においても有効である可能性が高い。つまり、2-1と2-2において、動詞の後には共に動態助詞の“着”が現れているが、この“着”は2つの文で性格を異にしている。“着”は「持続」を表すのがその本義であるが、“动态存在句”である2-1では“着”は「動作の持続」を表している。一方、“静态存在句”である2-2では“着”は「結果の持続」を表している。よって、動詞が結果性を含意した2-2だけが数量詞遊離を許すことが三原1998の考えからも正しく予測される。

また、高見2001 p. 120には「数量詞遊離を許す名詞句は、その文の主題(theme)として機能しうるものでなければならない」という主張がみられるが、上の5-1～5-5でみた中国語の現状を考えると、中国語の遊離数量詞にも、同様の機能的な制約があるのかもしれない。

## 5.2 動詞の分類の問題

さらに別の問題として、存在文の“动态存在句”“静态存在句”という概念と、「非能格動詞文」「非対格動詞文」という概念は必ずしも等価ではないという事実がある。

たとえば宋1986、1992は“动态存在句”に現れうる動詞として以下のものを挙げている。

“飄、奔腾、泛动、翻腾、流动、燃烧、回荡、闪烁、浮动、闪、游动、散发、滚动、漂浮”(以上 宋1986)

“游动、走、跑、飞、放射、洋溢、弥漫、回响、飞翔、流传、转动、荡漾”(以

上 宋1992)

宋氏の挙げるこれらの動詞には、非対格動詞と考えられるものが少なくない。もっとも、「非対格性の仮説」にもとづく中国語動詞の分類はまだ始まったばかりであり、今の時点では動詞の分類について十分な吟味が行われているとは言い難い。また、どれが非能格動詞でどれが非対格動詞かという問題は、各言語によって一致しない面もあり、なかなか複雑な問題である(たとえば楊素英1999参照)。よって“動態存在句”や“静态存在句”といった中国語の存在文に使われる動詞に対しては、今後さらなる研究を経た上で遊離数量詞現象の分析を行う必要がある。

## 6. おわりに

本稿では中国語の存在文において、遊離数量詞と考えられる可能性のある現象について、主に構造にもとづく統語的な観点から初歩的な分析を試みた。中国語の遊離数量詞の現象も日本語同様に、機能主義的な観点や動詞のアスペクト的意味類型といった異なる観点からの分析が不可欠である。それによって、統語的な分析もより高い説明力を得ることができるようになるにちがいない。

注1) 人によってこの日本語訳の適格性の判断は分かれるかもしれないが、筆者にはかなり許容度の低い文であると思われる。また、注4)の指摘も参照のこと。もしこの適格性判断が正しいとすれば、中国語と日本語で同じ適格性がみられることになり、興味深い問題である。

注2) ここに挙げた相互c統御条件の定義は、Miyagawa1989 p. 70以外に片桐1992 p. 148、三原1998(上) p. 88、高見・久野2002 p. 411等を参考にした上で分かりやすい書き方にしている。

注3) その理由として以下の2文が意味を異にすることから、移動による派生では問題が生じることが挙げられる。

(i) 前を走っていた2台の乗用車がつかまった。

(前を走っていた車は2台だけ。その2台がつかまった)

(ii) 前を走っていた乗用車が2台つかまった。

(前を走っていた車は2台以上。その中の2台がつかまった)

(井上1978 p. 175)

注4) 3-5の許容度は人によって差が大きいですが、少なくとも下に挙げる相互c統御条件を満たす文に比べると、許容度が低い文であることは確かである。

(i) [NP 2人の子供] がゲラゲラと笑った。

(ii) [NP 子供が2人] ゲラゲラと笑った。

注5) 中国語ではまだ遊離数量詞の研究は多くないので、先行研究から中国語の例文を集めるのは難しかった。本稿で特に出典を明らかにしてない例文は筆者の作例であるが、すべてインフォーマントに適・不適格性を確認してある。

注6) 非対格動詞の主語がD構造では動詞の補部位置に生成されることについては、すでに3-8でみた。

注7) これらの日訳の適格性については3-5および注4)を参照。

## 主要参考文献

秋山 淳1996 「非対格性の仮説と存現文」『北九州大学大学院紀要』第10号  
p. 123-137

井上和子1978 『日本語の文法規則』大修館書店

片桐真澄1992 「書評論文(Shigeru Miyagawa :Structure and Case Marking in Japanese)」『言語研究』第101号 p. 146-158

木村英樹1981 「「付着の“着/zhe/”と「消失」の“了/le/”」『中国語』7月号  
No. 258 p. 24-27, 17 大修館書店

林 璋2002 「中国語の数量詞とアスペクト」『日中言語対照研究論集』第4号

- p. 91-105 白帝社
- 三原健一1998 「数量詞連結文と「結果」の含意 [上・中・下]」『言語』  
Vol. 27 No. 6-8 大修館書店
- Miyagawa, Shigeru1989 『Syntax and Semantics 22 : Structure and Case  
Marking in Japanese』 New York : Academic Press
- 宋 玉柱 1986 《现代汉语语法十讲》南开大学出版社
- 1992 《现代汉语语法基本知识》语文出版社
- 高見健一2001 『日英語の機能的構文分析』鳳書房
- 高見健一・久野暉2002 『日英語の自動詞構造』研究社
- 山口直人2003 「中国語の遊離数量詞」『日本中国語学会 第53回全国大会予  
稿集』 p. 122-126
- 杨 素英1999 〈从非宾格动词现象看语意与句法结构之间的关系〉《当代语言学》  
第1卷 第1期 p. 30-43